

# 国際健康開発 IHD

特定非営利活動法人(NPO)会報 22号 2023年(令和5年) 1月

2023年初初めてのNPO国際健康開発会報をお送りします。昨今、新型コロナウイルスの終焉には程遠く with corona となっています。また昨年の2月から始まったロシアのウクライナへの侵入戦争はまだ終わりが見えません。日本経済にも悪い影響を及ぼしています。

さてNPO国際健康開発においては、2022年6月から10か月間JSPS海外研究者の招へい事業でAriful Hoque先生(バングラデシュ)が、11月には17日間AMED事業でPattara Khamrin先生が来日されました。それぞれ、元気に研究(Hoque先生は下水中のウイルスの解析とヒトサポウイルスの分子疫学、Khamrin先生はアストロウイルスのイムノクロマトキットの開発)および学会発表を行いました。(Hoque先生は2013年3月までの予定)。素晴らしい結果を出されておりますので、自国に戻られてからも引き続きこの方面で活躍してくれると思います。

会員において、江下先生は7月に17日間モンゴルに蚊の採集に行かれました。コロナ禍で国内外交通機関を使って外出するのを躊躇しますが、一方Zoomを使った交流、勉強会などが盛んになってきました。NPO国際健康開発として2021年後半から増えてきたサポウイルス、アストロウイルスに対する迅速診断法の開発を一つの目標として進めております。

今回の号には、私が存じている元内閣官房副長官 古川貞二郎さんの逝去についての私の思い出と新聞記事と、江下先生のモンゴルにおける研究活動報告を載せていた

だきました。

牛島廣治

## 古川貞二郎さんについての思い出

牛島廣治

佐賀県(私の郷里)出身の古川さんとの出会いは、私が公益財団法人の母子衛生研究会の評議員になり、年初めの交流会の時でした。東京大学に勤め始めて最初の新年会の時と思います。母子衛生研究会は「心豊かな親づくりとすべての子どもの幸せ」のための普及活動をしていて母子健康手帳や母子保健の主たる統計を発刊、また赤ちゃんを中心とした子育ての支援活動をしています。古川さんは社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会の会長・理事を長く務められていて、母子衛生会の新年会に毎年招待されたと思います。懇親会の時、集まって話されていた一群の中におられました。お偉い方の集団のようで、その中には恐れ多く入っていけなかったのですが、挨拶をしました。その後、新年会でお会いすることが何回もありました。

佐賀高校の関東地区の同期の集りのおり、M氏から高校の先輩に賢人がいて話を聞きに行こうという事になりました。10数年前になりますでしょうか、その時、官庁関係はすでに退職されておられましたが公的な会の会長、相談役などをされていました。2回ほど伺って酒を交わしました。永田町近くの麹町のビルでセキュリティーのしっかり

しているところでした。政治家、新聞記者などとの勉強会はこういったところで行っているのかと思いました。そして最後にお姿を拝見したのは 60 名ぐらいの同期会そのものに出たいただいた時でした。お話を聞いていてさすがすごい方と思いました。新聞にも書かれているように代々の総理に信頼

されて仕えられたと思いました。清楚な方で、官僚の模範たる方と思いました。また葬儀も東京と佐賀で行われ、すがすがしい旅たちを見たような気がしました。新聞記事を別紙としてつけさせていただきます。(合掌)。



古川貞二郎さん（元内閣官房副長官）逝去の記事〔2022 年 12 月 12 日発行 朝日新聞（夕刊）より一部改変引用〕

<https://www.asahi.com/articles/ASQD872ZTQD70LZU002.html>

[https://sitesearch.asahi.com/sitesearch/?Keywords=古川貞二郎&Searchsubmit2=検索&Searchsubmit=検索&ioref=pc\\_gnavi](https://sitesearch.asahi.com/sitesearch/?Keywords=古川貞二郎&Searchsubmit2=検索&Searchsubmit=検索&ioref=pc_gnavi)

## モンゴル滞在記

北海道大学

人獣共通感染症国際共同研究所

江下優樹

<はじめに>

2022 年 7 月に、モンゴルを訪問する機会を得た。モンゴルに隣接している中国領の内モンゴルには講演のために出かけたこと問記では、モンゴルに滞在した 12 日間の出

来事をまとめた。



(写真 1) 日本とモンゴルの位置関係

#### <モンゴル到着>

モンゴル訪問では、成田国際空港からの直行便で、かつ、いつも札幌～羽田間で利用している飛行機と同型の中型機であったので、国内線に乗ったような気分で極めて楽な旅であった。ちなみに、中国領の内モンゴルまで一人旅をした際は、スマートフォンのような便利な携帯電話がなかったこともあり、旅の途中で 1 泊して、かろうじて最終目的地の空港に到着したことがあった。空港に出迎えてくれた研究者からの第一声は、「よく無事にここまで来られましたね」であった。中国語が飛び交う中での旅行では、確かに異境の地を旅しているような不思議な感じであったことを思い出した。

モンゴルのチンギスハーン国際空港に到着した際の入国条件は、新型コロナウイルスのワクチンを 3 回接種済の証明書を持参することであった。飛行機のエコノミークラスでは、機内持込手荷物は 5kg、預ける荷物は 23kg までが無料であった。手荷物の 5kg は、パソコンと少しの資料でその重さになったので、持参の手荷物は厳選した。なお、追加料金を払えば、重い荷物も持参でき

るシステムではあった。

空港到着後、パスポートコントロール、そして税関を通過して EXIT を出た場所で、S 先生と運転手に会った。車にのって 1 時間ほどで S 先生のお住まいに到着した。首都のウランバートルにはホテルはあったが町中のみで、山手のなだらかな斜面に建っている獣医科大学の近くにはホテルがなかったので、S 先生のご厚意で御自宅に居候させていただくことになった (写真 2)。専用の寝室とバスルームを使わせていただいたので、ホテルとさほど変わらない快適な日々であった。



(写真 2) 宿泊したマンションからの眺め  
(獣医科大学は中央奥の山手側にある)

宿泊先からプロジェクトのある獣医科大学までは徒歩 13 分ほどであった。なだらかな山の斜面を歩くのは慣れていなかったもので、最初は少し疲れた。また、車は右側走行なので、横断歩道を渡るときは気をつける必要があった。

#### <モンゴル高原は、緑の大草原>

都会のウランバートルは、標高 1,350m 程のほぼ平らな高原に位置していて、山に囲

まれた盆地の中に町や工場があるといった様相であった。少し町から離れると、7月のモンゴルは全面が緑色をした大草原が果てしなく広がっていた（写真3, 4, 5）。



（写真3）方牧民のゲルが遠くに5棟ほど見える



（写真4）ぽつんと一軒家（中央奥の白いゲル。モンゴルでは、普通に見られる）

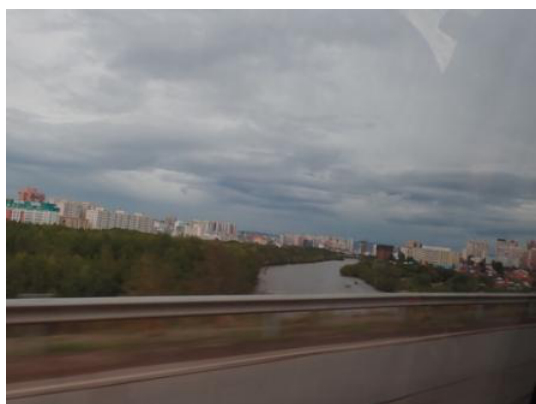
ちなみに、ほぼ同じ季節に内モンゴルの上空から見た景色は、山肌には緑はなく砂漠も見えた。モンゴルの冬季は積雪量が少ないが気温が $-30^{\circ}\text{C}$ になると聞いたので、この緑の景色は一変するのであろう。モンゴルでは一日の寒暖差が大きく、私の滞在中、日中は $27^{\circ}\text{C}$ だが夕方から朝方にかけて、6～

$9^{\circ}\text{C}$ まで気温が下がることがしばしばあった。また、雨が降る日は土砂降りで道路の一部が冠水することもあったが、雨の降った日でも湿度が低いので、室内の洗濯物は半日程で乾いたのには驚かされた。



（写真5）草原には蛇行した河川

モンゴル地域は湿度の低い乾燥した環境だが、町の中には大きなトゥール川があり（写真6）、宿泊先のマンション4階からも眺める事ができた。日本の一級河川なみの川幅で、なみなみとした水が、かなり早い早さで流れていた。



（写真6）ウランバートル市内を流れているトゥール川

<新型コロナウイルス感染症>

COVID-19 の第 7 波が日本で始まる直前に、私は日本を離れてモンゴルを訪問したので、日本での感染者の急増をモンゴルの NHK 国際放送のニュースで知った。日本で感染者が増え始め時期に、モンゴルでも患者が若干ではあるが増えた。バスでの通勤や都心に用事があって出かける際は、マスクを付けるヒトが多くなったと現地の方から聞いた。しかし、それ以外では大学を含めて、マスクをしているヒトの数は極めてまばらであった。私もいつのまにか、マスクをしないで大学に行っていた。

なお、帰国の数日前に大きな病院の駐車場に設置された PCR 検査のための仮設コンテナの外側で、鼻腔からの検体を採取されて PCR 検査をしてもらった(写真 7)。検査に先立ち、スマートフォンで事前予約から検査料の前払いを行うと、予約番号と検査日がスマートフォンで知らされた。予約当日に検査会場に行くと、受付で予約番号と氏名の確認があり、検体採取となる。検査会場には私以外には検査を受けるヒトはいなかったもので、10 分ほどで検査は終了した。検査結果は、同日の夕方には登録に使用したスマートフォンに知らされた。PCR 陰性の結果が知らされた時はホッとした。

#### <日本へ帰国するための PCR 検査証明書>

検査の翌日に再度病院を訪問して、病院が発行する PCR 陰性証明書を入手すると同時に、日本の外務省発行の PCR 陰性証明書(ホームページ、雛型掲載)にも証明サインをもらった。日本の外務省が準備している MySOS にその証明書をアップロードしておく、日本に帰国時の空港での手続きが簡略化された。MySOS を自分のスマートフォン

に登録するのは若干面倒ではあったが、日本の職場の仲間から登録方法を日本出発前に教えてもらって MySOS に登録しておいた。なお、成田国際空港に帰国してわかったことだが、訪問国の PCR 陰性証明書さえあれば、空港での必要書類に記入する手間はかかるが入国は可能であった。



(写真 7) 病院の建物(左奥)と PCR 検査用の建物(病院手前の白い建物)

#### <モンゴル北東部での調査>

モンゴルの獣医学研究者および S 先生らと一緒に、ランドクルーザー 2 台に乗って、モンゴル北東部の町 4 ヶ所で蚊の調査を行った。蚊由来の病原体調査の一環で、蚊の採集や鑑別法の検討を獣医学者らと一緒に行った。

ウランバートルは、日本の青森から北海道とほぼ同じ緯度に位置する。しかし、モンゴルはロシアと中国に囲まれた内陸の国であることから北方系と南方系の蚊が生息することが推測された。モンゴルの研究者で日本語に担当な G 先生からモンゴルの蚊に関する文献を教えていただいた。論文の一部はロシア語で書かれていたが、蚊の学名は世界共通であったので、蚊種のみはすぐ

に察しがついた。しかし、それぞれの文献から蚊の生態などを知るために、最初は Google 翻訳でロシア語から英語，そしてその後日本語へと機械翻訳した。日本に帰国後、S 先生から、無料ソフトの DeepL (<https://www.deepl.com/translator>) を教えていただき、ロシア語文献は、ロシア語から日本語へ精度の高い機械翻訳で内容を調べる事が出来た。

今回の北東部での蚊調査は、4 泊 5 日の旅であった。モンゴルのウランバートルから、北東部までは 260km ほどであり、車では 4 時間ほどで到着できる距離であった。しかし、連日の雨で、幹線道路(写真 8, 9, 10, 11, 12)であっても舗装されていない部分が約 3 分の 2 を占めていたことから、道路の至るところのくぼみには水がたまり(写真 13)、さらに柵のない道路には牛やヤギが道路を封鎖していることもあったので(写真 14, 15)、それらを避けるために車は道路を直進することができなくて、時速 60km を維持することは難しかった。



(写真 8) ウランバートルから調査地までの約 400km の幹線道路の 3 分の 1 は舗装済



(写真 9) 幹線道路の側には大草原が広がっている。草原の標高は 1,000m なので、低いように見える山々はそれ以上の高さとなる。



(写真 10) 菜の花畑（菜種油の原料）



(写真 11) モンゴル高原の菜の花畑



(写真 12) 調査地までの 3 分の 2 は未舗装



(写真 15) 道路上のヤギの群れ



(写真 13) 調査地までの 3 分の 2 は未舗装道路（降った雨による多数の水たまり）



(写真 14) 幹線道路上をあるいている牛

北部調査地では、東西 100km 内の川の側の林、あるいは草原で蚊の採集を行った。昼間は、茎の高さが 30cm ほどの草原の草の間に潜んでいる蚊を、捕虫網を使ってスweepingで成虫蚊を採集した。蚊の成虫は河川近くの草原をスweepingすると多数の蚊が潜んでいて採集できたが、近くの湿原地帯で蚊の幼虫を見つけることは出来なかった。湿原地帯の草原では主にヤブカ類の成虫が潜んでいたため、増水等で一過性的に多くの蚊卵が孵化して幼虫・蛹となって成虫が一斉に羽化したのかも知れない。

調査期間中は、雨の降る日が続いていたので、川はほぼ満水状態で川の流れも速かった。蚊の調査に出かけた川の近くには草原が広がり、木々もあったので、ファン付のライトトラップで夜間活動性の蚊を採集した。川では近くの住民が投げ釣りをして 25cm 程のナマズを釣っていた(写真 16)。

モンゴルの研究者はテントを持参していたので、蚊を採集する場所近くでテントを設営した。テント設定地に向かう途中の町で、飲料水などを買い込んだ(写真 17)。夕食では、モンゴル特製の岩塩で味付けした肉うどんスープ(ゴリルタイシユル)や牛肉

入り混ぜご飯（写真 18）を料理していただいた。



（写真 16）流れの速い川で釣れたナマズ



（写真 17）町中のスーパーマーケット



（写真 18）牛肉入り混ぜご飯

モンゴル風の岩塩入り夕食ははじめてで

あったが、いずれも美味しかった。また、少し岩塩の入ったブラックティーというお茶は、野外調査で疲れていたためか、美味しいお茶であった。塩分も一緒に摂取できるので、これは良いアイデアかと思った。夕食時にはビールあるいはウオッカなどを飲む日もあった。いずれもモンゴルの食事によくあった味だと思った（写真 19）。



（写真 19）ビール（モンゴル製タイガーと若者愛飲の Sengur）とウオッカ

なお、テントを張った野营地での夕食時には多数の蚊が飛来したので、日本から持参したハエ・蚊用の蚊取り線香（成分はフェノトリン）をテーブルの下に置いて使用した。ほぼ無風だったこともあり、蚊取り線香を使用後は、驚くことに野外でも蚊に刺されなくなった（写真 20）。私はテントに泊まる機会がなかったが、草原の草の上にシートを敷いたテントでの睡眠の方が、寝心地が良かったのではないかと思った。

調査日の最後の夕食は料理の材料も無くなったので、テーブルが 3 席の小さな食堂で水餃子入りのスープを食べた（写真 21）。また、昼食はやはり小さな食堂で食べたが（写真 22）、その隣のお店では大きな食パンを売っていた（写真 23）。



(写真 20) 野外での夕食時にテーブルの下に置いたトランスフルトリン含有の太巻蚊取り線香



(写真 21) 岩塩で味付けした水餃子入りスープ



(写真 22) 昼食を食べたレストラン

また別の食堂では、テーブル 3 席程のレストランでの昼食では、直径 20cm ほどの半月状の特大サイズの揚げ餃子（ホーショ

ール）(写真 24) で、牛のひき肉が入っている。そのまま、なにもつけなくても美味しい味であった。



(写真 23) 幹線道路側のお店（食パンのサイズは、日本の 3 倍ほど大きい）



(写真 24) 直径 20cm ほどの半月状の特大サイズの揚げ餃子（ホーショール）

調査の最終日に、調査地からウランバートルまで車で戻ることにした。ウランバートルまでランドクルーザーのほうが早く到着するようだが、ゆれる車の中よりも列車のほうがゆれも少ないであろうとのモンゴル研究者のご厚意でそのように決めた。

乗車する駅が始発だったこともあり、前日に切符を購入することが出来た。早朝の出発であったので、駅から徒歩 5 分程のと

ころにある簡易宿泊所に泊まった。早朝 5 時起きであったが、部屋の窓から見た外の景色は、盆地特有の朝霧で遠くはかすんでいた（写真 25）。



（写真 25）盆地特有の朝霧



（写真 26）車窓からの眺め（草原には蛇行した河川）



（写真 27）車窓からの眺め



（写真 28）車窓からの眺め

汽車の客室は 4 名の個室であったが、S 先生と案内役で英語の堪能なモンゴルの研究者が 1 人同乗してくれたので 3 人旅であったので心強かった。汽車の線路は、山手の裾野当たりを縫うように 3m 程の盛り土の上に線路は作られていた。ランドクルーザーからの車窓よりも汽車の方が高い位置から遠くの景色を眺めることが出来た（写真 26, 27, 28）。

#### <蚊の種同定>

採集した蚊の成虫は、虫眼鏡を用いて同じ蚊種かどうかを採集した現場で調べた。夕方近くになる前でも、草原に隠れている成虫を捕虫網でスリーピングすると、蚊を採集する事ができた。少し薄暗くなり始めると、吸血するために、どこからともなく多数の蚊が吸血のために飛来してきた。

#### <楽しかった共同生活>

朝は 7 時頃に起きて、朝食後に、山の手にある大学の一室まで、歩いて行った。モンゴルでもコロナウイルス感染症があることからレストランでの食事はできるだけ避けて、自炊となった。

日本に帰国前に、S 先生宅で料理を持ち寄

ってお世話になった方々との食事会を開いていただいたので、楽しい思い出となった。日本からは機会がないと訪問できないモンゴルでの貴重な経験をさせていただきましたS先生と JICA プロジェクトの皆様に感謝申し上げます。

### あとがき

第 22 号では、「古川貞二郎さんについての思い出」を牛島先生が寄稿されました。牛

島先生と同郷である故 古川貞二郎さんのお人柄についても、詳しく語られています。また、「モンゴル滞在記」を江下が寄稿いたしました。広大な緑の大地に広がる風景を写真から想像していただければ幸いです。

COVID-19 の世界的な大流行から既に 3 年が経過しています。ワクチンと新薬の開発などによって状況が好転することを願っています。

(江下 編集)